

「遇うことの意義」

東本願寺では、3月19日より宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要がお勤まりになっています。御遠忌とは50年ごとに勤められる記念法要です。すでに御遠忌に遇われた方、これから遇われる方、今回はご縁がなくて遇えない方。それぞれがそれぞれの想いを胸にされていらっしゃることでしょう。

では、御遠忌に遇うと言っていますが、いったい私は御遠忌の何に遇うのでしょうか。

この御遠忌にあたり、本山では「宗祖としての親鸞聖人に遇う」という基本理念が打ち出されました。ただ親鸞聖人に遇うのではなく、「宗祖としての」とあらためて確認されていることです。

「宗祖」とは、宗を開かれた祖師という意味だけではなく、七百五十年たった今でも念珠を握って今現在説法され、私たちにまこと（真）のむね（宗）をいただくよう願われているのです。私たちはその宗祖の呼びかけに出会い、その願いをあらためて聴き、自身の生き方を問うていきたいと思えます。

ともすれば、京都に行ける、京都で土産が買えると喜び勇んでおでかけの方もいらっしゃるかもしれません。そんな私たちにこそ、50年に1度しかない遇い難い法要にたまたま出遇うことができ、自ら東本願寺の親鸞聖人の前まで身を運び、その場に座り、お念仏をいただけるような身にさせていただくご縁をいただけたのではないのでしょうか。

親鸞聖人が呼びかけてくださっているお言葉、お姿を、願ってくださっているお心を受け止め確かめさせていただく、それが「宗祖としての親鸞聖人」に遇うことの意義であると私自身思っています。